

本 を読もう！

第6集

きみたちに
読んでほしい本を
二冊あげると



和光大学の先生たち
いま、きみたちに読んでほしい本を2冊ずつ選んでもらった。
これはその第6集。

研究分野から1冊、自由に選んだおすすめの本を1冊。

よく知っている先生もあまり知らない先生も、
本を通して見えてくる顔はどこか親しみ深い。

この冊子が、
あなたと、本と、先生をつなぐきっかけになりますように。

現代人間学部 心理教育学科

〈推薦者〉 〈頁〉 〈紹介する本〉

〈著者名〉

阿部 慶賀 8

『弱いロボット』の思考——わたし・身体・コミュニケーション
『マイノリティデザイン——「弱さ」を生かせる社会をつくらう』

岡田美智男
澤田智洋

五十嵐 敏文 10

『NHK考えるカラス——「もしかして？」からはじまる楽しい科学の考え方』
『漫画君たちはどう生きるか』

NHK「考えるカラス」制作班編
吉野源二郎原作、羽賀翔一漫画

菅野 恵 12

『つげ義春日記』
『児童養護施設鹿深の家の「ふつ」の子育て——人が育つために大切なこと』

網島庸祐、川畑隆編ほか
つげ義春

小松 賢亮 14

『心理療法の精神史』
『おとうさんとぼく』

山竹伸二
e.o.ブラウエン

坂井 敬子 16

『職場学習論——仕事の学びを科学する』
『能力——の生きつらさをほぐす』

中原淳
勅使川原真衣

末木 新 18

『ふつうの相談』
『フレデリック——ちょっとかわったのねずみのはなし』

東畑開人
レオ・レオニ

辻直人 20

『教師のためのからだとは考』
『魂を握ろう——ユージン・スミスとテイリーンの水俣』

竹内敏晴
石井妙子

根来 章子 22

『歌詞のサウンドテクスチャー——うたをめぐる音声・詞学論考』
『静かな大地』

木石岳
池澤夏樹

韓仁愛 24

『みんなで保育実践を科学する——大切なことを自分たちの言葉にする』
『一人のために——詩集』

保育実践研究会編著
安積得也

山口 理沙 26

『絵本のなかの動物はなぜ一列に歩いているのか——空間の絵本学』
『御馳走帖』

矢野智司、佐々木美砂
内田百閒

人間科学科

上野 俊哉 28

『椿の海の記』
『華童の宮（へう）（へう）』

石牟礼道子
上田早夕里

打越 正行 30

『断片的なものの社会学』
『深夜特急』（主六巻）

岸政彦
沢木耕太郎

堂前 雅史 32

『都市で進化する生物たち——ダーウィンが街にやってくる』
『臨済録』

メノ・スヒルトハウゼン
入矢義高訳注

原田 尚幸 34

『マナー・ボール』完全版
『質問会議——チーム脳にスイッチを入れる！——なぜ質問だけの会議で生産性が上がるのか？』

マイケル・ルイス
清宮雅英代

米田 幸弘 36

『同調圧力——デモクラシーの社会心理学』
『スマホ依存から脳を守る』

キャス・サンスティーン
中山秀紀

表現学部

総合文化学科

阿部 明子	38	『英語脳スイッチ！——見方が変わる・わかる英文法26講』 『スマホ脳』	時古秀弥 アンデシュ・ハンセン
飯田 基晴	40	『生きなおす、ことは——書くことのちから——横浜寿町から』	大沢敏郎 林直哉
稲葉 有祐	42	『省略の文学』 『社会科学の考え方——人間・知識・社会』	外山滋比古 水田洋
遠藤 朋之	44	『カニツンツン』 『逃避めし』	金関春太ふん、元永定正え 吉田戦車
沖田 瑞穂	46	『すごい神話——現代人のための神話学53講』 『怖くて眠れなくなる植物学』	沖田瑞穂 稲垣栄洋
坂井 弘紀	48	『神話研究の最先端』第2集 『未承認国家に行ってきた』	篠田知和基、丸山顕誠編著 嵐よういち
田村 景子	50	『戦争の深淵——闇（コレクシヨン戦争と文学12）』 『世界と私のAtoZ』	大岡昇平ほか 竹田ダニエル
津田 博幸	52	『神話と意味』 『ト・テムとタブー——1923年「フロイト全集12」』	フロイド・レヴィンストロース クロイト
長尾 洋子	54	『ちんどん屋の響き——音が生み出す空間と社会的つながり』 『ビジュアル日本の音楽の歴史』3近代・現代	阿部万里江 徳丸吉彦監修、塚原康子
西田 桐子	56	『黒い皮膚・白い仮面』 『ドグラ・マグラ（ヘトヘト）』	フランツ・ファノン 夢野久作

馬場 淳	58	『人喰い——ロックフェラー失踪事件』 『親切の人類史——ヒトはいかにして利他の心を獲得したか』	カール・ホフマン マイケル・E・マカロー
宮崎 かすみ	60	『シャーロック・ホームズの回想』 『アクロイド殺し』	アーサー・コナン・ドイル アガサ・クリステイ

芸術学科

椛田 ちひろ	62	『絵画の冒険——表象文化論講義』 『アーティストの手紙』 ——ダ・ヴィンチ・ゴッダ、モネ、ロダン、ウオーホル・・・・100人の気がかり—— 『中国の死神』	小林康夫 マイケル・バード
君島 彩子	64	『名古屋の富士山すべり台』	大谷亨 牛田吉幸著、大竹敏之編
里見 佳音	66	『たのしく、イラストディレクション！』 『100年の旅』	白川桃子編著 ハイク・フォーラ文
高橋 啓祐	68	『映像が動き出すとき——写真・映画・アニメーションのアルケオロジ』 『吉増剛造詩集』	ヴァレリオ・ヴィダリ絵 トム・ガニング
詫摩 昭人	70	『アート之力——美的実存論』 『絵画の解放——カラーフィールド絵画と20世紀アメリカ文化』	吉増剛造 マルクス・ガブリエル
野々村 文宏	72	『権力の空間／空間の権力——個人と国家の「あいだ」を設計せよ』 『箱男』	加治屋健司 山本理顕
半田 滋男	74	『ヤンキーと地ノ元』 『こども東北学』	安部公房 打越正行

『ヤンキーと地ノ元』——解体屋 風俗経営者 ヤミ業者になった沖繩の若者たち』
山内明美、100%ORANGE
及川賢治装画・挿画

経済経営学部 経済学科

加藤 巖	76	『DIE WITH ZERO——人生が豊かになりすぎる究極のルール』 『マカン・マラン』シリーズ	ビル・パーキンス 古内一絵
清水雅貴	78	『日本の農山村をどう再生するか』 『なぜ椅子をつくるのか——松本クレイン・ノートの椅子製作者たち』	保母武彦 坂井素恵ほか
棚井 仁	80	『日本の近代化と民衆思想』 『自分のなかに歴史をよむ』	安丸良夫 阿部謹也
永石 尚子	82	『空の旅の自然学』 新版 『働く居場所』の作り方——あなたのキャリア相談室』	桑原啓三ほか 花田光世
半谷 俊彦	84	『教育再生の条件——経済学的考察』 増補 『プロジェクト・ヘイル・メアリー』〈上〉〈下〉	神野直彦 アン・デイ・ウィーアー
経営学科			
岩見 昌邦	86	『13歳から鍛える具体と抽象』 『アドルフに告ぐ』〈全四巻〉	細谷功 手塚治虫
海老原 諭	88	『申し訳ない、御社をつぶしたのは私です。』 『小さき者へ』——コンサルティングはこうして組織をぐちゃぐちゃにする』	カレン・フェラン 重松清
大野 幸子	90	『グロービスMBAマーケティング』 改訂4版 『小学館の図鑑NEO 危険生物』	グロービス経営大学院編著 塩見一雄ほか指導・執筆
小林 正典	92	『日本の観光——きのう・いま・あす——現場からみた観光論』 『東京裏返し——社会学街歩きガイド』	須田寛 吉見俊哉
富間 政義	94	『エンパワリング・リーダーシップ』 『なぜ3人いると噂が広まるのか』	青木幹喜 増田直紀
平井 宏典	96	『レスボンシブル・カンパニーの未来』 ——バタゴニアが50年かけて学んだこと』 『香港風味——懐かしの西多士』	ヴィンセント・スタンリー イヴォン・シュイナード 野村麻里
福田 好裕	98	『ルーズな文化とタイトな文化』 『左利きの言い分——右利きと左利きが共感する社会へ』	ミシェル・ゲルファンド 大路直哉
吉沢 壮二郎	100	『帳簿の世界史』 『Humankind 希望の歴史』 ——人類が善き未来をつくるための18章』〈上〉〈下〉	ジェイコブ・ソール ルトガー・ブレグマン



阿部 慶賀

Keiga Abe

心理教育学科

認知科学

① 『弱いロボット』の思考——わたし・身体・コミュニケーション』

岡田美智男（講談社現代新書）

② 『マイノリティデザイン——「弱さ」を生かせる社会をつくらう』

澤田智洋（ライツ社）

① AI全盛の現在、ロボットもまた万能に働き、人の仕事を奪い、敵視される場面すらある。しかし、この本に紹介するロボットたちは万能じゃない、頼りない、む

しろ人の助けが必要なロボットたち。こうしたつい構ってやりたくなるへ弱いロボットへが、人の良識的な行動や親切心を引き出していきます。本書では人の自発的な行動を引き出し、協同を生み出すかわいらしいロボットと人との共存の姿が事例とともに語られています。ドラえもんが作られるのはまだまだ先なのですが、ロボットとともに過ごす日常はそう遠くないのかもしれないかもしれません。

② スポーツ、特に体育の授業でやるチーム競技にいい思い出がない人もいるのではないだろうか。私もその一人ですし、そしてこの本の著者もまた同様です。そんな著者が提唱したのが「ゆるスポーツ」。スポーツが苦手な人も不利にならず、下手でも、失敗してもそれはそれで面白い。もちろん体が不自由な人でも楽しめる。そんなユルくも懐の広い競技の数々を生み出しています。本書ではそうした競技の事例とその狙いが紹介・解説されています。読んでみて、そして実際にやってみるのもいいでしょう。



五十嵐 敏文

Toshifumi Karasfui

心理教育学科

理科教育学 学校教育学

①『NHK考えるカラス——「もしかして？」からはじまる楽しい科学の考え方』

NHK「考えるカラス」制作班編（NHK出版）

②『漫画君たちはどう生きるか』

吉野源三郎原作、羽賀翔一漫画（マガジンハウス）

①NHK Eテレで放送されている「考えるカラス」科学の考え方」を図書にしたものです。皆さんは考えることは好きですか？ この図書では、考えるということは頭の中が「もやもや」している状態であると言っています。スマートフォン等で検索すると

答えがすぐに分かる世の中ですので、頭の中が「もやもや」している状態が好きですと答える人は少ないかもしれませんが、どんな小さなことでも「なんでだろう？」「不思議だなあ？」と考えていた子どもの頃を思い出してみてください。そして「？」が「！」に変わった瞬間を思い出してみてください。考えることは素敵で楽しいということを、きっとこの図書を通して思い出せるはずです。

②「ほんとうに人間って分子なのかも……」主人公コペル君が最初の場面で言った言葉です。皆さんはこの言葉をどのように捉えますか？ 私はマイナスイメージの言葉であると考えました。その後、様々なことを経験し考えたコペル君は「太陽みたいになつたひとつの大きな存在が世の中をまわしているのではなくて 誰かのためにたつた小さな意志がひとつひとつつながって 僕たちの生きる世界は 動いている」と言い、こういう考え方で生きていくようになりました。言っていることは同じですが、考え方や見方によって自身の生き方は変わっていくのかもしれない。これからの長い人生をどのように生きていきたいかを考えるきっかけになる本だと思います。



菅野 恵

Kei Kanno

心理教育学科

児童心理学

① 『児童養護施設鹿深の家の「ふつう」の子育て——人が育つために大切なこと』

網島麻祐、川畑隆綱ほか（明石書店）

② 『つげ義春日記』

つげ義春（講談社文芸文庫）

① 虐待を受けた子どもや不適切な環境で過ごしていた子どもたちが、児童相談所に一時保護されてからその後どうなるのかといったことは案外知られていない。本書は、滋賀

県にある児童養護施設「鹿深の家」で子どもたちを育ててきた複数の職員が、八つの事例を紹介し、事例の経過やケースをめぐる心情を赤裸々に語っている。また、施設という特殊な環境なのに、書名にある「ふつう」とは何だろうかという疑問を念頭におきながら読み進めると、「人が育つ」ということの奥深さを考えるきっかけになるであろう。

② 画家・つげ義春の作品を読んだのは、「つげブーム」で『無能の人』などが映画化された一九九一年ごろ、私は思春期にさしかかる多感な時期であった。『夏の思い出』などの一連の作品に衝撃を受け、これまで出会ったことのない悲壮感漂う作風に魅了されたのである。エッセイを手がけた本書では、極度の対人恐怖症や不安神経症、離人症、希死念慮に見舞われながらも、子育てのことや闘病中の妻との関係などが綴られている。「こ

うあるべき」という世間の価値観を脱したい人、無理に明るくふるまっている人は、つげ氏の生き方に触れると肩の力が少しは抜けるかも!?



小松 賢亮

Kenseuke Komatsu

心理教育学科

健康・医療心理学

① 『心理療法の精神史』

山竹伸二(創元社)

② 『おとうさんとぼく』

e. o. プラウエン (岩波少年文庫)

① 本書は、心理療法の成り立ちや発展について、その時代背景や哲学、開発者の思想との関連からひも解いている本である。古代の呪術的治療から精神分析、認知行動療法、来談者中心療法、ナラティブセラピーなど、さまざまな心理療法がどのように生まれ、

進化してきたのかを歴史的に解説している。単なる技法の理解にとどまらず、その背後にある文化や哲学的な意味、ひいては、人とは何なのか、心とは何なのか、人は何を求めて生きているのか、そして、心理療法とはどうあるべきなのか、そんなことを考えさせてくれる本だ。心理学を学ぶ学生にとっては、技法や学派の偏りなく心理療法の歴史を幅広く理解するための参考になる一冊であろう。

② 茶色く黄ばんだ表紙のない一冊の本は、いつからか覚えていないが、幼い頃からずっと私の本棚にある。ずっとあるというよりも、むしろ何度引越しても捨てられずに持っているという表現が正確かもしれない。本書は一九三〇年代に描かれたドイツの風刺漫画で、父と息子の温かくユーモラスな日常を描いた作品だ。コマ漫画で色彩もセリフもない。一話が多くて六コマしかない。にもかかわらず、顔が綻んでしまう笑いと優しさ、「人」を届けてくれる。昔は「ぼく」目線で好きだったかもしれないが、自分が父親になって尚更愛おしく感じる一冊である。おそらく死ぬまで捨てられないし、息子に託すのかもしれない。きっと息子は迷惑かもしれないが……(苦笑)。



坂井 敬子

Keiko Sakai

心理教育学科

キャリア心理学

① 『職場学習論——仕事の学びを科学する』 中原淳（東京大学出版会）

② 『「能力」の生きづらさをほぐす』

勅使川原真衣（どく社）

① 職場の中で働きながら、学習する、学ぶ。たとえば本人はそう思っていないくても（「学んでないよ、働いてんだよ！」という認識でも）、職場の中で学ぶということは、働く人の日常でごく当たり前のことです。そんな職場学習を促す重要なファクターとして、中原は特に「他者」に注目しました。個人の能力向上を促すのは、どんな他者によるどんな支援なのか、さらには、どんな職場の雰囲気なのか。本書では、インタビュー調査やアンケート調査によって明らかにされています。私たちの成長は、決して個の中で閉じているわけでない。そのことがよくわかる一冊だと思います。

② 現代社会の職場や学校。ことあるごとに、人はいろんな「○○力」の物差しで測られます。それに疲れや怒りを感じている人。この世知辛さの解像度を高めるために、この本を読みましよう。著者は、組織開発を専門とする会社を開業した人。現在ががん闘病を続けながら、企業、病院、学校などの組織開発を支援し、二人の幼い子どもを育てています。本書の問題意識は、「こんな息苦しい社会に子どもたちが生きていくとしたら、死んでも死にきれない」ということ。「能力」なるものは、これまでいかに煽られてきたか。本当に介入すべきは、個の「能力」ではなく何なのか。この本で、それらの謎を解きましよう。



末木 新

Hajime Sueki

心理教育学科

臨床心理学

① 『ふつうの相談』

東畑 開人（金剛出版）

② 『フレデリック——ちょっとかわったのねずみのはなし』

レオ・レオニ（好学社）

① 今、私の専門領域（臨床心理学／心理臨床学）で最も読むべき文献は何かと考えた時、真っ先に浮かぶのはやはりこの本になるだろう。本書は、近年において、最も臨床心理学／心理臨床学に真摯に向き合い、学問の形を模索した人間の一つの到達点である。本

書は、様々な心理療法の学派や資格の相違を越え、コミュニティを統合するために書かれた書籍だが、その意義について理解するためには学問の歴史について理解をする必要がある。そのため、本書のみを読んだところで、その意義について皆さんは十分に理解できないであろう。心理職を志す学生には、本書を起点に、学問の歴史を理解し、この本の意義を理解できるようになってもらいたい。

② 本学はいわゆる「文系」と呼ばれるような学問によって構成された大学である。皆さんもそのような学問を学んでいる。一方で、現在の社会は「文系の学問って何の役に立つんですか？」というプレッシャーに溢れている。文学や芸術は、そのようなプレッシャーの最前線に立たされているし、私が専門とする心理学も程度の差はあれ似たようなものかもしれない。皆さんは、自分が今学んでいることの意味や意義について、どのような「言葉」を持っているだろうか。古い絵本と侮るなかれ。本書は、芸術家／絵本作家であるレオ・レオニの芸術論／文学論でもある。皆さんには是非、この本を通じて、我々が学ぶ学問の意義について考えてみていただきたい。



辻 直人

Naoto Tsuji

心理教育学科

日本教育史 教育学 日本キリスト教史

① 『教師のためのからだとことば考』

竹内敏晴(ちくま学芸文庫)

② 『魂を撮ろう——ユージン・スミスとアイリーンの水俣』

石井妙子(文藝春秋)

① 少年時代に耳の病気で言葉を発することが困難になった演出家の竹内敏晴は、自分の中に「マグマのように熱いもの」があり、それが噴き出て相手と触れ合うことで、人として育つことを実感した。一方で、「現在の学校制度の一斉授業の場では、それは教員に

とって不可能に近い。」とも感じた。「子ども同士が、子どもと大人が、どうしたら、まっすぐに向かい合い、働らきかけ、学ぶことを共にし、ひとりひとりが力一杯伸びてゆく場になりうるだろうか」。心に閉じ込められた「ことば」の解放を目指して、学校現場の教師たちに語りかける渾身の一冊。学校や教育についての深い洞察は、今の私たちにも大事な視点を投げかけている。

② 戦場カメラマンだったユージン・スミスは、写真を通じて戦争の醜さを告発しようと奮闘したが、沖縄戦で大怪我を負ってしまう。しかし心身ともにぼろぼろになって、写真への情熱だけは失うことがなかった。ユージンが最後の作品として写真を撮り続けたのが、水俣の公害で大企業と闘う住民たちだった。ユージンと妻アイリーンは一九七一年に水俣に入るが、水銀汚染による奇病に苦しみつつ闘う住民に心動かされ、共に闘いながら場面を写真に収めていく。人生を翻弄される出来事に遭遇した時、どのように事態に立ち向かうのか。命を削りながら生き続けた彼等の生き様から、人間の尊厳や、生への熱い思いをかきたてられる作品である。



根来 章子

Akiko Negoro

心理教育学科

音楽教育学 音楽学

① 『歌詞のサウンドテクスチャー——うたをめぐる音声同義論考』

木石岳（白水社）

② 『静かな大地』

池澤夏樹（朝日新聞社）

① 歌詞の機能は、聴き手に文学的な意味を伝えることだけではない。歌詞そのものが音響としての機能を持つ、という視点で様々な曲を分析した書。登場する曲は、BABYMETALにYASOBI、米津玄師からジェーン・バーキンと多彩だ。促音（っ）が音

との相乗効果で焦りや緊張を高める例や、曲の前半で特定の母音を強調し、後半で別の母音に移行して印象を変える例など、様々な仕掛けが提示される。そういえば、言葉の音を楽しむ感性は、オノマトペを多用する私たちの中には確かにあるし、子どもの自然な創作歌にも見られる。歌詞のテクスチャー＝質感も表現の一形態なのだ。音楽にはこんな聴き方もある。巻末の註記も筆者のユニークな思考に溢れていて面白い。

② 北海道への旅から帰った後、読んだのが本書。訪れた日高地方・静内を舞台にした長編小説である。明治初期に北海道（蝦夷）に入植した兄弟が、アイヌの人々と交流を深めていく。その言葉や習俗を身につけ成長した主人公は、やがてアイヌと共に牧場を運営し、繁栄を導いた。しかし和人による抑圧と収奪は執拗さを増し、アイヌの友であろうと尽力した主人公の運命も翻弄されていく。長い物語だが、アイヌの生活や昔話、豊かな自然の有りが様が全編を穏やかに支え、惹き込まれる。この文化を失わせたのは「誰」なのか。読みながら、時代のせいにしてたり国のせいにしてたりする自分と向き合わせるを得なかった。若い世代に読み継がれてほしい一冊である。



韓 仁愛

Inae Han

心理教育学科

保育学

① 『みんなで保育実践を科学する——大切なことを自分たちの言葉にする』

保育実践研究会編著（ひとなる書房）

② 『一人のために——詩集』

安積得也（善本社）

① 日々の保育の場では楽しいことだけではなく、悲しいことも、戸惑うこともたくさんあります。その場にいる子どもも保育者も、自分でもがき悩みながら様々な出来事の中で成長し、暮らす場でもあります。保育は保育者という人で決まると言っても過言ではないと思うのです。その保育者自身が日々の子どもとの関わりを「これでいいのか」と

振り返り、子どもや仲間に素直になった上で学び合い成長していくことが、子どもの幸せにも連動するでしょう。本書では、日頃起こり得る様々な出来事を正解か不正解かではなく、状況に応じてその都度子どもたちと向き合い、子どもや仲間と共に作り上げていく過程を大事にする、みんなの話が綴られています。語り合う中で関わり方を探求し、保育実践を科学する眼差しで、「自分の関わりは」と思わず考えさせられます。それは保育に限らず子どもや人を捉える視点にもつながると考えられます。

② 以前親しくしていただいた知人より贈られて読み始めた詩集です。目まぐるしい程忙しい時やフツとひと息つきたい時に手にすると、気持ち落ち着き、安堵できます。長文の説明があるわけでも、取って仕向けた文言があるわけでもないのに、詩語を自分らしく解説していく中で、自分にとっての意味を探す間が持てて、ホッとできるのです。本書で最も好きな部分を紹介します。「うしろ姿」、「語る人貴し／語るとも知らで／からだで語る人／さらに貴し／導く人貴し／導くとも知らで／うしろ姿で導く人／さらに貴し」（四四ページ）。そのような自分になりたい、生きたいと毎回思うのです。人としてどのように物事を捉えるか、生きるかを示されているようにも思えて、心を無にできるからこそ素直になれるかもしれません。



山口 理沙

Risa Yamaguchi

心理教育学科

保育学 教育思想

①『絵本のなかの動物はなぜ一列に歩いているのか——空間の絵本学』

矢野智司、佐々木美砂（動植物房）

②『御馳走帖』

内田百閒（中公文庫）

① タイトルの問いに、あなたは答えることができますか？ 絵本は決して「コドモダマシ」ではないことが、本書を紐解くことにより明らかになります。ひとは何度でも絵本に出会うことができます。一度目は、幼少期に読み聞かせてもらうことによって。二度

目は、自分で一字一字辿りながら、音読することによって。三度目は、血縁者の子どもや同僚の子ども等、次の世代への読み聞かせによって。しかし、二度目と三度目の出会い直しの間に、絵本に触れる機会がもうひとつあります。それは外国語の習得を通してです。大学生の今こそ、（外国語の、日本語の）絵本との出会いの機会です。絵本のなかの動物たちの動きを、本書と併せて絵本で確かめてください。

② あなたは本をどこに置いていますか？ バスルームに本棚のあるかたも多いとか。ここでは、我が家の台所の本棚にレシピとともに差している本について紹介いたします。食卓に近いその本棚から本書を引っ張ってきて、腹ごなしに食後に読むことが私は多いです（食意地）。なお、本書は臥せったときにも効果的で、回復した暁に美味しいものを食む決意が湧き起ります（底知れぬ食意地）。著者の内田百閒は、戦前、戦中、戦後、どのような時代下においても食欲なまでに美味しいものを探究した作家です。アイスクリームを「飲む」ものとして描くところに、食べ物への飽くなき思惟を感じます（ちなみに、シュークリームは「啜る」と描写しています）。



上野 俊哉

Toshiya Ueno

人間科学科

社会思想史 文化研究 エコソフィー (生態哲学)

① 『樺の海の記』

石牟礼道子 (河出文庫)

② 『華電の宮』〈上〉〈下〉

上田早夕里 (ハヤカワ文庫)

① 国家と資本がもたらした水俣病、これに呼応する社会運動をルポや小説を通して見つけた石牟礼道子が、水俣病以前の時代や幼年時代の記憶、人々の生活、ゆたかな自然を繊細な筆致で描いたエッセイ。彼女は人の話をこまやかに聞くのみならず、人間以外の「生類」、虫や鳥、魚の声にまで耳をかたむける。それでいて彼女の文章には、弱いもの、小

さいものを自称する者たちにあるがちなルサンチマン (反感・恨み節) はいささかもない。料理や食材についてのあれこれも読みどころ。魚や海藻、その海の幸に豊かな味わいをもたらした山の植物や生きものたちを見つめつつあみだされた土地の味、彼女のレシピを自分で再現してみるのもいい。抑圧された苦しみのうちですら、ひとはあそび、楽しむというリアルにふれる。

② 環境変動と戦禍による海面上昇で水没した地球が舞台の SF シリーズ。主人公はかすかに残った「日本群島」の外交官。世界はいくつかのブロックに分かれ、さらに「陸上民」と「海上民」に分断されている。語り手は助手の AI 知性のアンドロイド。遺伝子工学によって改造された「海上民」は人間と山椒魚のような生きものの双子として生まれる。海上民は、この「魚舟」(うおぶね) と呼ばれる双子が成長した巨大な魚の外骨格の居室に住まい、歌声で魚船を操作して陸上民とは別に海で生きている。相方を見失った双子は「獣舟」(けものぶね) として怪獣化して人間を襲う。人間と人間でないものとのつきあいに思いをめぐらしながら楽しめるエンターテインメント。安部公房の『第四間水期』、小松左京の『日本沈没』、そして石牟礼道子と読み比べるのもいい。



打越 正行

Masayuki Uchikoshu

人間科学科

社会学 沖縄 参与観察

① 『断片的なものの社会学』

岸政彦 (朝日出版社)

② 『深夜特急』 (全六巻)

沢木耕太郎 (新潮文庫)

① 教養を身につけるとか、単位をとるためとか、いろんな理由があるけれど、やはり学生には本を読んで欲しい。本著では、本は出口になるからという理由で読むことがすめられている。「なんでこんな人生になっちゃったんだ」、「ここじゃないどこかに逃げ出

したい」けれど、そんな簡単に脱出できない。本を読むと、こんな人生、この世界とは異なる世界が確かにあることを教えてくれる。脱出することは勇気がいるけど、出たところにはここではない人生、世界が確かにあることを教えてくれる。ぜひ本を読んで、あなたの出口をみつけてください。

② 沢木耕太郎によるバックパッカーのバイブル。読み始めたら、いったん本を閉じて、旅に出ちゃえばいい。それで、旅を通じて、自身のものの見方が変わったなら、それについて書いてみたらいい。そんなのおもしろいに決まってるから、和光銀座で売りさばいちゃえばいい。大学で学ぶのはそれからでも遅くない。

打越正行先生は二〇二四年十二月九日にご逝去されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。



堂前 雅史

Masashi Daumae

人間科学科

科学技術社会論 動物学

① 『都市で進化する生物たち——ダーウィンが街にやってくる』

メノ・スヒルトハウゼン（草思社）

② 『臨済録』

入矢義高訳注（岩波文庫）

① 学生に自然とは何かと聞くと「都市化されていないこと」という答えが出ることが多いが、野生生物の生態系はそんなに単純ではない。進化生態学の進展によって、都市環境に似た自然環境に前適応していた生物がいることや、都市環境に適応する進化が意外

と早く進み、中には新種が誕生しそうだということなどが判明してきた。最終章では六本木ヒルズの事例が出てきて驚かされる。都市的生態系は、本物の生物を生息させ、本物の生態と本物の進化が進行する本物の食物網の中に維持される生態系そのものなのだ。進化のしくみについて初心者にも分かりやすく説明されているので、進化生物学の入門書としても好適。

② オンラインで要点を絞った授業動画を作成した時、分かりやすいものができたと思えたものの、単に知識を効率よく伝達するだけの授業になって、正解のない問いにたえず未知性が欠けてしまったことに気付いた。その時思い出したのが若い頃に読んだ本書。禅の奥義と無縁の私は、臨済和尚の説法の部分はそこに読み、なにかと殴り合う唐代禅僧の言行録の部分を不思議な余韻の説話集として「分からなさ」を楽しんだ。読み返してみても、自分が卒論指導時に「自分の外に求めるな、自分の中から読み出せ」とお説教してるのは、この本のいい加減な借バカリだったかと思いつた。この入矢訳注が画期的であることは小川隆『臨済録のことば——禅の語録を読む』（講談社学術文庫）に詳しい。



原田 尚幸

Naoyuki Harada

人間科学科

スポーツマネジメント

① 『マネー・ボール』完全版

マイケル・ルイス（ハヤカワ文庫）

② 『質問会議——チーム脳にスイッチを入れる！』

——なぜ質問だけの会議で生産性が上がるのか？—— 清宮普美代（PHP研究所）

① 近代野球では、選手的能力を数値化して評価したり、データを基に作戦を考えることが当たり前になってきました。『マネー・ボール』は、その先駆けとして、MLBのオーランド・アスレチックスでゼネラルマネージャーを務めたビリー・ビーン氏が、統計学に基づく「セイバーメトリクス」の手法を用い、安価で有能な選手を獲得してチームを改革し、弱小球団を地区優勝へと導く過程を描いたノンフィクション作品です。従来の慣習を打破し、最後まで信念を貫いて成果を出したビーン氏の姿は、ブラッド・ピット主演で映画化され（映画「マネーボール」）、大きな話題となりました。書籍とあわせてぜひご視聴ください。

② 会議の場では、生産的で活発な議論によって意見が集約されることが理想です。しかし、実際には、声の大きな人の意見に引きずられたり、萎縮したり、反対意見に感情的になってしまい、冷静で建設的な議論が難しくなることが多々あります。『質問会議——チーム脳にスイッチを入れる！——なぜ質問だけの会議で生産性が上がるのか？』では、相手に質問を投げかけることで真意を引き出し、発言の矛盾や誤りに自ら気づかせる手法が紹介されています。授業でも学生の皆さんに紹介しているこの本は、ビジネスパーソンとして有効なスキルを身につける助けとなるので、ぜひ一読ください。



米田 幸弘

Yukihiko Yoneda

人間科学科

社会学 社会意識論

①『同調圧力——デモクラシーの社会心理学』キャス・サンスティーン（白水社）

②『スマホ依存から脳を守る』

中山秀紀（朝日新書）

① おかしいと思っても声を挙げにくい空気が集団内に形成されることがある。特定人物への付度や、少数派になることへの不安、専門家への判断委任などの様々な要因が絡んで「同調」の連鎖が生じ、集団全体が誤った方向に向かうことがある。このような同調のメカニズムについて、様々な実証結果を紹介しつつ論じているのが本書だ。同調は社

会がまとまるために必要な面もあるが、個人の判断を放棄させ、集団の暴走への歯止めを失わせる危険な作用ももたらしうる。職場やサークル等でおかしな意思決定がまかり通るのはなぜか。民主主義の決定プロセスがどんな危うさを孕んでいるのか。これらの問題を考えるうえで本書は格好のテキストである。

② 酒、タバコ、ギャンブルなど依存性があるものの多くは未成年の利用を法律で禁じている。しかし、スマホ（等のインターネット機器）の利用には法的規制がない（原稿執筆時点）。多くの未成年がスマホ依存症に陥り、生活が破綻している深刻な実態があるにも関わらず、生活必需品でもあるスマホの利用は野放し状態だ。スマホ依存は「本人の自己責任」もしくは「家庭でのしつけ」の問題で片付けるにはもはや限界があり、社会全体で取り組むべき課題だと本書は問題提起している。依存症メカニズム全般の基礎知識が得られることに加え、「社会が取り組むべき課題は時代に合わせて変わる」ことを痛感させてくれる社会問題への入門書としても本書はお勧めだ。



阿部 明子

Akiko Abe

総合文化学科

言語学 英語学

① 『英語脳スイッチ!——見方が変わる・わかる英文法26講』

時吉秀弥(ちくま新書)

② 『スマホ脳』

アンデシュ・ハンセン (新潮新書)

① この本で解説されている「英語脳」とは、英語を通じて見える「世界の捉え方」や「人間関係の捉え方」のことです。英文法を単なるルールとしてではなく、「意味を表すもの」として考えます。たとえば、助動詞には「自分が思っていること」を表す機能があり、

過去形には「人間関係の距離」を示す意味があります。本書では、このような英語話者の世界の見方が数多く紹介されています。外国語を学ぶことで新しい世界の捉え方を知り、日本語を外国語と比較することで日本語独自の見方にも気づけます。文法はルールの集まりではなく、その言葉を話す人々の「世界の捉え方」の表れだと理解すると、英文法の勉強が少し面白くなるかもしれません。

② 学生のみなさんが朝起きて最初にすることはスマホを手にとることではありませんか。一日の終わりのスマホのチェックで締めくくることが多いのではないのでしょうか。本書によると、私たちは一日に二六〇〇回以上スマホに触り、平均して十分に一度スマホを手にとっているそうです。著者は、スマホが脳に与える影響を最新の研究にもとづいて説明し、日常生活にどのように影響するかを詳しく解説しています。スマホを近くに置くだけで学習効果、記憶力、集中力が低下し、精神的健康にも影響を与えるとされています。今や欠かせないスマホですが、今後どう付き合っていくかを考える良いきっかけになると思います。



飯田 基晴

Motoharu Yūda

総合文化学科

ドキュメンタリー映画

① 『生きなおす、ことば——書くことのちから——横浜寿町から』

大沢敏郎 (太郎次郎社)

② 『高校生のためのメディア・リテラシー』

林直哉 (ちくまプリマー新書)

① 著者の大沢さんは、横浜の寿町で三十年にわたり識字学校を主宰してきた。ここでは読み書きのできない人が文字を学ぶだけでなく、覚えた文字で自らの人生を見つめ直すことを大事にしてきた。例えばこの文章だ。「文字のよみかきのできなかつたときは まい

にち かべにむかて にらめこしていました ところがさみしくてしかたなかつた」また識字学校には多くの学生も学びに来た。実は私もその一人だ。皆のまつすぐな文章に導かれ、誰にも言えなかつた自分のコンプレックスを書いて読み上げた。自分を閉じ込めていた殻から解放された。こんな経験をできる場は今も必要だ。大沢さんが残したこの本が、あなたの心の居場所になるかもしれない。

② メディア・リテラシーとは、メディア (伝達手段、表現方法) のリテラシー (理解し活用する術) を意味する。著者は長らく高校の放送部の顧問をしてきた。本書では、生徒たちが言葉、音声、映像といったメディアを使い、自分たちが調べ、知ったことを表現するプロセスを、豊富な事例をもとに紹介する。

「調べて知ること」は、対象の新たな側面を知り、自分の固定観念が壊されていくこともある。そこから生徒たちが大きく成長し、学校や地域を動かしていく様が圧巻だ。高校生が作った作品が、地域の環境問題に一石を投じていく。卒業式や入学式の意味を問い、形式的な儀式から生徒のための行事に変えていく。問いかける力は、社会を揺さぶる。



稲葉 有祐

Yusuke Inaba

総合文化学科

近世日本文学

①『省略の文学』

外山滋比古(中央公論社)

②『社会科学の考え方——人間・知識・社会』 水田洋(講談社現代新書)

① 俳句は、例えば「古池や」と一度「切る」ことによって、十七文字の中に余韻・余情を反響させる「空間」を作り出す。そして、全てを言い尽くさず、未完成の形で投げかける。それが読者の琴線に触れることで共鳴が生じ、詩情は増幅されていく。これらの表現行為には、受け手に対する敬愛と信頼があると外山はいう。文芸活動は、決して作者のみ

で完結するものではない。曖昧な表現・多様な解釈の可能性を活かせるかどうかは、深く鋭いあなたの「読み」にかかっている。この関係性が「粹」なのだ。本書では、近代の「芸術」という枠組みと対比させながら、言語の機能や詩の東西、翻訳の問題、感覚にまつわる論説・エッセイが楽しめる。

② 「エベレストを知っていますか？」という質問に、「知っている」と答えるということ。我々は、その山を知識として「知っている」と答える。地元民は、生活・常識として「知っている」。そして、実際に頂上に登った人は、個人の実感としてエベレストを「知っている」。これらの「知っている」は、同じ言葉でありながら、内実が異なる。とはいえ、登頂した人の実感を伝え聞き、自身にはめ込むことで、我々は思考することが出来る。思考することは他人になることであり、実感が常識を突き破ることもある。水田は「文学は科学の応用問題である」と述べ、専門化し近視眼的になった世界を捉え直す。浪人生の時に読み、「知る」ということを知った本。



遠藤 朋之

Tomoyuki Endo

総合文化学科

英米詩

① 『カニツンツン』

金関寿夫ぶん、元永定正え（福音館書店）

② 『逃避めし』

吉田戦車（イースト・プレス）

① 二〇世紀アメリカ詩紹介に多大な貢献があつた金関寿夫の晩年の創作。金関は「詩」の本質、つまり「うた」を自らの創作で体现してみせた。ここに意味はない。「カニツンツン／ビイ ツンツン／ツンツン ツンツン……」、それで降続く意味のない音の連鎖に、読者は笑うしかない！ そう、金関は本作で、言語の可能性を「ことばの遊び」、音

楽性にのみに絞って開示したのである。詩人の谷川俊太郎は、アフリカの太鼓タムタムをバックにこの作品を朗読、また、作曲家の間宮芳生がこの詩に曲をつけている。その様子はYouTubeでも確認できる。「カニツンツン 間宮」でぜひ検索を。この動画で笑えた人は、詩を楽しむ才能がありますよ。

② 漫画家の料理エッセイ。本書全編で笑えるが、和光在学中の居酒屋バイトでのまかない「具のないナポリタンとライス」のリベンジ飯がとくに笑える（「具のないナポリタン」ってなんだ？）。そう、料理とはそれを食べた時の記憶と不可分だ。本書全体で、吉田曰く「駄料理」を作って心底楽しんでる姿が本当にいい。「poetry」の語源はギリシャ語の「poiesis」「作る」だ。食事作り自体が詩的な遊びであり、自らを延命し、さらに作って食べた時の記憶まで残される。これほど詩的な行為であるか？ 先日はずミ生Aさんが卒論指導で来宅、エンドウ手製のラタトゥイユやスペイン風オムレツなどを食べ、「また来ます！」。ほら、食事ってこんなに詩的。



沖田 瑞穂

Mizuno Okita

総合文化学科

神話学

① 『すごい神話——現代人のための神話学53講』 沖田瑞穂（新潮社）

② 『怖くて眠れなくなる植物学』

稲垣栄洋（PHP文庫）

① 神話は今われわれにとって身近なものになっている。神話の断片が、ゲームや漫画、アニメといったサブカルチャーで頻繁に用いられるからだ。それらの神話の断片は、「現代の神話」として読み解くことが可能なのだろうか。神話の要件は「聖なる物語」であることである。現代の物語などにおいて「聖性」はありうるのか。それを考察したのが

本書である。『鬼滅の刃』『天気の子』『FGO』『マトリックス』『100万回生きたねこ』『進撃の巨人』『ハリー・ポッター』『トイレの花子さん』などを神話から読み解いてみる。すると、現代にも神話が豊かにわれわれの側に根付いていることが見えてくるだろう。

② 植物が怖いなんて、そんなことあるだろうかと思われるかもしれない。そんな植物の怖さ、そして面白さを軽妙に語るのが本書である。たとえば千年生きる木と、一年で死んでしまう草とがあつたら、あなたはどちらになりたいだろう？ 当然、千年生きる方がよさそうに思われる。しかし、進化の過程で、植物は「死」を手に入れた。死んでしまふ草の方が、進化の先にいるのだ。個として長寿であっても、木は病原菌に侵されるかもしれないし、災害にあうかもしれない。それよりは、個としてはすぐに死んでしまつても、子どもを作って世代交代していく方が、生存戦略としては秀でているのだ。そのような植物の意外な生態について、本書は楽しく話題を提供してくれる。



坂井 弘紀

Hiroki Sakai

総合文化学科

中央ユーラシア文化史

① 『神話研究の最先端』第2集

篠田知和基、丸山顯誠編著（笠間書院）

② 『未承認国家に行ってきた』

嵐よういち（彩図社）

① タイトル通り、神話研究の最先端がわかる本である。第一線の神話学者がそれぞれの専門にもとづいて著した論文十七篇が収録されている。

「神話はもう消え去るだけなのだろうか」という問いにたいする、“伝統的な神話が、名前が同じだけの別の形に変わっても、神話の構造自体は別の名前をもって生き続ける”（同書四五ページ。松村一男「神話のこれまでとこれから」）との答えは的確できわめて重要

である。

二〇二三年に亡くなられた、神話学研究の第一人者、吉田敦彦氏への追悼論文集でもある本書は、神話研究を志す、あるいは現在進めている学生にとって必読の書である。二〇二二年に刊行された第一集もあわせて読むことを薦めたい。

② 本書の著者は、ロシアに二〇一四年に「編入」された「クリミア共和国」やモルドバ領内の「沿ドニエストル・モルドバ共和国」、グルジア領内の「アブハジア共和国」、ユーゴスラヴィア内戦により独立した「コソボ共和国」、そしてトルコの軍事侵攻により生まれた「北キプロス・トルコ共和国」の「五か国」を訪ねた。いずれも国家承認をする国のほとんどない「未承認国家」である（コソボ共和国は多くの国が承認しているがセルビア、ロシア、中国などが承認していない）。

二〇一八年発行のこの本の内容は、現在では大きく異なっているはずだが、本書を読めば、未知の世界を旅している気分が味わえるとともに、国家とは何かという問題を考えさせられるだろう。



田村 景子

Keiko Yamura

総合文化学科

近現代日本文学

① 『戦争の深淵——闇』（コレクション戦争と文学12） 大岡昇平ほか（集英社）

② 『世界と私のA to Z』

竹田ダニエル（講談社）

①本書は、戦争の惨劇になんとしても届かねばならぬと編まれた、戦争文学のコレクションである。大岡昇平や武田泰淳らの戦後派小説はもちろん、在日文学から梁石日と金石範、アジア太平洋戦争を知らない世代である浅田次郎や田口ランディ、詩や短歌、俳句に川柳……。様々な立場とジャンルで表わされた、多様かつ多層的な戦争がひしめく。そしてその一つ一つが、戦争の惨劇を繰り返さぬために戦争を直視し、表現せんとする渴望と

祈りに満ちている。

どうすれば、届くのか……。どうすれば、とり返せるのか……。

世界的戦争の時代にある私たちにこそ、かつての惨劇で損なわれた「とり返せないもの」をどうしてもとり返す」（木下順二『沖繩』） 不断の試みは、かすかな希望なのではあるまいか。

② 一九九〇年代後半から二〇一〇年ごろに誕生した世代は、「Z世代」と呼称される。

そんなZ世代ど真ん中の筆者が、Z世代の「社会に対して目を向け、常に自分と向き合い、誰もがより良い社会を目指すべきだ」という「価値観」を説く。多様な人種と思想の存在を、インターネットを通じた膨大な情報として実感するZ世代こそが、大人たちが見て見ぬふりをして解決せずに後回しにし続けたおぞましき問題と前向きに向き合えるのだ、と。

「弱さ」を受け容れ、「推し」を応援し、搾取を嫌って人生の本質を見つめる——「絶望的な世界に生まれた“Z世代”が『愛』と『連帯』で価値観の革命を起こす！」（竹田ダニエル『＃Z世代的価値観』の帯より）。

しなやかで強い生き方が、ここに。



津田 博幸

Hironuki Tsuchida

総合文化学科

古代日本文学

① 『神話と意味』

クロード・レヴィ＝ストロース（みず書房）

② 『トートテムとタブー——1912-13年』（フロイト全集12） フロイト（岩波書店）

① 現代日本のアニメや漫画や、あるいは（私はやらないが）ゲームも〈神話〉として読み、その意味を考えることができる。それはレヴィ＝ストロースが神話を読み解く新たな方法を考え出し、我々に残してくれたからである。レヴィ＝ストロースは神話を人間の根源的で普遍的な思考方法としてとらえた。人間は〈神話〉で世界について思考しているのだ、と。だから、誰も神話を語らなくなった現代日本でも思考方法としての〈神話〉

は生き続けている。サブカル物語も〈神話〉なのである。本書は、そのレヴィ＝ストロースの神話のとらえ方・読み方の入門的理解に最適な書。ここから、『構造人類学』や『神話論理』へと読み進めてほしい。

② たとえば『進撃の巨人』や『鬼滅の刃』について考えるなら、食人は人間の根源的欲望であり、原罪なのだと考えたこの本を読むべきだ。フロイトは精神分析という神経症治療法の創始者だが、主に男児の治療を通していわば人類の心の歴史を構想するに至った。心の発達についても系統発生が個体発生で再現されると考えたからである。いわく、原初的人类は一人の強い父親が女たちを独占する集団で暮らしていた。しかし、ある時、女たちから遠ざけられ、同性愛的感情と行為で結びついた息子たちが協力して父を殺し、その肉を食べてしまった。この原罪から人間社会は始まった。これが、男児の父殺害欲求として再現されるのだ、と。凄すぎる妄想である。



長尾 洋子

Yoko Nagao

総合文化学科

文化地理学

①『ちんどん屋の響き——音が生み出す空間と社会的つながり』

阿部万里江（世界思想社）

②『ビジュアル日本の音楽の歴史』3 近代〜現代

徳丸吉彦監修、塚原康子（ゆまに書房）

①ポップでレトロなイラストの表紙に描かれているのは、商店街をゆくちんどん屋の音の広告隊だ。派手な衣装や楽器編成は和洋が不思議に入り混じっている。音楽に誘われて窓から顔を出した人の姿もみえる。

このイラストに凝縮されているように、本書は幕末にルーツをもち、盛衰を経て今も活動を続けるちんどん屋を追いかけて、音、街、人のあいだに生み出されるものを丹念

に描き出したエスノグラフィである。ちんどん屋に触発されたミュージシャンたちにも著者は目を向け、行動を共にしながらフィールドワークを進めた。

気鋭の民族音楽学者が捉えた「響き」に共振しながら文化を捉え直す——新鮮な読書体験が得られることはまちがいない。

②音、音楽、音楽すること（ミュージッキング）、音楽文化を探究する営みが勢いづいている現在、おもしろい本が次々に出されている。だが、ハードルが高いと感じる学生も多いのではないだろうか。

本書は私たちが漠然と抱いている「音楽」の枠組み（概念、分野、通念）がじつは近代以降に導入、形成されてきたことを教えてくれる。新しい研究をふまえた興味ぶかいトピックや豊富なビジュアル資料は中高生も想定した編集上の工夫で、つい引き込まれてしまう。

「Ⅲ 現代の音楽（戦後〜現在）」で自分の音楽史的現在地を確認してから、明治時代へとさかのぼって読んでいくのはどうだろう。その過程で出会う歴史の奔流に、さまざまなドラマ、いわゆる「音楽」からこぼれ落ちていったものささえ見えるかもしれない。



西田 桐子

Kiriko Nishida

総合文化学科

比較文学 戦後日本文学

① 『黒い皮膚・白い仮面』

フランツ・ファノン（みずす書房）

② 『ドグラ・マグラ』〈上〉〈下〉

夢野久作（角川文庫）

① 尊厳をいかに取り戻すか、差別や偏見からの解放は可能なのか、そして自由とは何か、ということ考えたときに、一度は手に取ってもらいたい名著。黒人の精神科医であるファノンは、本書でフランスの植民地における人種差別について書く。しかし、ファノンが自身を見つめ、そして差別や疎外の構造を見つめることを通して、読者へと伝える

絶望と希望は、人種を理由とする差別にとどまらず、あらゆる種類の差別や抑圧について考えるヒントをくれる。何より、「おお、私の身体よ、いつまでも私を、問い続ける人間たらしめよ!」と、他者に触れて感じることを止めず、ひとりひとりの意識の解放を目指して、思考し続けるファノンの態度に勇気づけられる。

② 自分を見つめすぎて息苦しくなった時に読みたい一冊。ミステリー？ SF？ それとも怪奇小説？ はたまた幻想小説？ 『ドグラ・マグラ』は、それらのどの枠からもしみ出す、まさに「三大奇書」の名に恥じない怪作である。十年もの歳月をかけて書かれた（ちなみに、本作発表の翌年に作者は急逝）、ボリウム満点の長編小説だからこそ、一気に読むよりも、毎日チビチビと味わいながら読み進めるのが良い。「チャカポコ」してしまい途中離脱しそうになっても、ぐつとこらえて読んでいけば、半分を越えた頃には、想像したこともない世界があなたの「脳髓」に永劫消えることなく刻み付けられるはず。表現もとてもユニークなので、創作を志す人にもお勧め。



馬場 淳

Jun Baba

総合文化学科

文化人類学

① 『人喰い——ロックフェラー失踪事件』 カール・ホフマン（垂紀書房）

② 『親切の人類史——ヒトはいかにして利他の心を獲得したか』

マイケル・E・マカロ（みすず書房）

① 一九六一年、大富豪ロックフェラー家の御曹司マイケル・ロックフェラーがニューヨークニア島南岸で失踪しました。かの地に暮らすアスマットの人々に殺されたといわれています。このセンサーショナルな大事件の謎については他にも本が出ていますが、著者の

カール・ホフマンは実際に現地を訪れ、村にホームステイをし、殺人やカニバリズムをめぐるアスマットの精神世界に「内側から」迫ります。ホフマンはジャーナリストですが、その姿は文化人類学者に通じるものがあります。ここでは文化人類学を面白いもの・身近なものに感じられる第一歩としてお勧めしますが、何より自分の足で謎を探索する楽しさを感じとってもらいたいものです。

② 分断や争いが絶えない現代世界に生きていると意外に思われるかもしれませんが、今日は「思いやりの黄金時代」だと著者はいいます。人類史上、これほどまで見知らぬ人に援助の手を差し伸べる時代はなかったからです。そんな利他の心は、人間の本性か、それとも歴史的に構築されたものなのか。本書はどちらかではなく、その二つが絡まりながら今にいたる道程を辿ります。とくに著者が注目するのは、ここ一万年の歴史で人類が直面した「七つの大いなる苦難」です。どこかで学んだ歴史的出来事がこれまでとは違った意味をもって立ち現れてくる感覚を楽しみながら、私たちの利他行動や親切心について思いを巡らせてもいいかもしれません。



宮崎 かすみ

Kasumi Miyazaki

総合文化学科

英文学 思想史

① 『シャーロック・ホームズの回想』 アーサー・コナン・ドイル（光文社文庫）

② 『アクロイド殺し』 アガサ・クリスティー（ハヤカワ文庫）

①患者のこない開業医、ドイルが暇に飽かして書きはじめたのが名探偵ホームズが活躍する推理小説だった。医学生時代に教えを受けた名物教授の卓越した診断法を犯罪推理に応用したこの推理小説は、たちまち人気を博し、ドイルは本業そっちのけの売れっ子作家になった。ところで、ホームズの推理が医学に端を発していたことは意味深長だ。凡人の見落とす微小な手がかりを、ホームズは時に拡大鏡を駆使して微細に観察し事件の全体像を構築するという彼の推理は、医学の症候学に則っているし、犯罪性を病理と結びつける傾向には医学の影響がうかがえる。

ホームズの推理で、表面に現れた「記号」が必ずや一つの意味（内部）に辿り着くという設定はホームズの推理の特徴だが、これは推理を単調にしてしまい、今では欠点ともなっている。ホームズもので、異形の人が登場すれば大体それが犯人。さらに、社会が共有する外見による差別や偏見を浮上させ、またその意識を助長することにもつながる。今となつては古風な発想だが、どんな点が今の推理と相いれないかを考えながら読めば、批評の訓練になる。特に天才犯罪者のモリアティ教授との一騎打ちを描いた「最後の事件」は必読。

②こちらも含わせて読むのがお奨め。ある意味、ホームズの推理の真逆を狙っているのがこの作品。現代の推理小説は、ホームズとは対照的に、誰が犯人なのかがまるでわからない、あるいは思ってもみない人物が犯人、という奇想天外やどんでん返しをウリにするが、その先鞭をつけたのがこれ。その後『そして誰もいなくなった』や『オリエンタル急行殺人事件』といった名作が生まれた。ドイルの「ねじれた男」を彷彿とさせる『ねじれた家』（一九四九年）では、予想を裏切る真犯人というお得意のプロットに、ホームズのな遺伝的病理を掛け合わせた渾身の大団円には、クリスティの円熟した筆が冴えわたる。



梶田 ちひろ

Chihiro Kabata

芸術学科

絵画

① 『絵画の冒険——表象文化論叢』

小林康夫（東京大学出版会）

② 『アーティストの手紙——ダ・ヴィンチ、ゴヤ、モネ、ロダン、ウォーホル……

100人の気がかり』

マイケル・バード（マール社）

① 絵画を学ぶ学生に読んでもらいたい一冊。一年間の講義形式・二十七講にまとめられており、テキストも語りかけるように書かれていて読みやすい。範囲はチマブーエとジョットから始まってウォーホル、バスキアまでのおよそ六〇〇年。私は大好きなカラヴァッジョが出てくるページではうつかりニヤけてしまう。皆さんも、よく知る大御所アーティストの作品がたくさん登場するのできつと楽しく読めるだろう。それに著者である小林康夫さんの語りがまた楽しい。著者の詩的な気分や思い切った解釈が、絵を観る楽しさや、自分ならどう考えるかなといった楽しみ方を教えてくれる。「絵画とは何か？」このワクワクする冒険の入口に立ってみよう。

② モネ、ウォーホルなど、一〇〇人ものアーティストの手紙を集めたという本。「絵にも描けない巨匠たちの本音」という宣伝帯がついていた。歴史に名を残す彼らの日常のこと、恋人のこと、支払のこと、制作の悩み、それから単なる問合わせまで読めてしまう。ロダンはクロードに頼まれた水着を買えたのだろうか？ 有名なアーティストたちも、私や皆さんと同じように悩んだり、くだらないことをしたりするひとりの人間だ。読めばきつとアートを身近に感じられる……かもしれない。「自分の私信が公開されるなんてまっぴらだ！」この本に手紙が収録されているアーティストのうちの数人は、きつとこんなふうに思っていることだろうと想像してしまうけれど。



君島 彩子

Ayako Kimisima

芸術学科
文化史

① 『中国の死神』

大谷亨（青弓社）

② 『名古屋の富士山すべり台』

牛田吉幸著、大竹敏之編（風媒社）

① 背の高い帽子をかぶり、長い舌をダラリと垂らし、ときに人の魂を連れ去り、ときに人に福をもたらす中国の死神「無常」。日本ではほとんど馴染みがないが、寿命が尽きようとする者の魂を捉えにくるこの冥界からの使者は、中国では生活に深く根差し、民間

信仰の対象となっている。筆者は中国において二年半に及ぶフィールドワークに基づきながら、無常の歴史の変遷を緻密にたどり、無常が妖怪から神へと上り詰めたそのプロセスや背景にある民間信仰の原理を明らかにしている。さらに本書では筆者がフィールドワークで撮影した写真を中心にカラー図版が百三十点以上所収されており、その図版を見るだけで中国の民間信仰を感じることができる。

② これまで美術史ではほとんど扱われてこなかった公園の遊具の写真を多数掲載し、解説する書籍だ。一九六〇年代後半、名古屋市では公園の整備計画の中でコンクリート製の山型の遊具が設置された。やがて市民からは「富士山すべり台」と呼ばれるようになった。富士山すべり台は名古屋市を中心に東海三県の公園にのみ設置されている。愛知県在住の会社員である筆者は、郷土の遊具である富士山すべり台研究の第一人者だ。休日のたびに名古屋市内の公園を歩いて回り、行政も把握できていなかった公園遊具の歴史と実態を明らかにした。前例がない研究対象であっても、好奇心と探求心、そして継続によって大きな研究成果となることを知ることもできる一冊。



里見 佳音

Kaoto Satomi

芸術学科

広告 イラストレーション

① 『たのしく、イラストディレクション！』

白川桃子編著（ビーエヌエヌ）

② 『100年の旅』

ハイケ・フォーラ文、ヴァレリオ・ヴィタリ絵（かんき出版）

① グラフィックデザイナーがイラストレーターに仕事を発注する時に必要な意識や心構えを様々な事例を交えながら紹介する専門書。実制作のプロセスを読むだけでも勉強になりますが、著作権や契約についても詳しく書かれていたり、売れっ子イラストレーター

のインタビュも数多く掲載されています。グラフィックデザイナーだけでなく、イラストレーターを目指す人にとっても非常に勉強になる本です。（作品事例として私の仕事も数点紹介して頂きました）

② 〇歳〜九十九歳まで、人生の様々な局面で感じる感情や気づきなどの言葉を綴った書籍で、一つ歳を重ねるようにページをめくると様々な言葉に出会えます。自分の今の歳のページを見ても、過去の歳のページを遡っても、まだ先の歳のページを見ても。なんとなく不安になったり、元氣が出ないときに読むと心が軽くなる大好きな一冊です。各ページに描かれている色鉛筆やクレヨンの温かみのあるイラストレーションもこの本の魅力のひとつ。グラフィックデザインのセンスが高いイラストレーションなので、絵を描くのが好きな人、イラストレーターに興味がある人にもお勧めの本です。



高橋 啓祐

Keisuke Takahashi

芸術学科

映像

① 『映像が動き出すとき——写真・映画・アニメーションのアルケオロジー』

トム・ガニング（みず書房）

② 『吉増剛造詩集』

吉増剛造（ハルキ文庫）

①「アニメ」という言葉には「命を吹き込む」という意味がある。映像が動き出したのは今から一〇〇年とちよつと前の話である。そのときどうやって映像は動き出したのか、どうやって命は吹き込まれたのか。この本は当時の様々な研究とその膨大な資料、そして歴史に基づく新しい視点で書かれている。初めて映像を見た人はそこにどんな感動を

覚えたろう。映像はある一瞬を収めた一枚のコマから成る。その瞬間の連続から成る。それが「動く」という現象を作り「生きている」瞬間の連続を生み出す。この本を読んだらためて映像という現象を見てみよう。「映像が動き出すとき」、私たちはそこに何を見るだろう。そしてこの本は高いから図書館で読もう。

② 詩なんて意味がわからない。そんな声を聞いたりするけど、そもそも私たちは意味に囚われすぎてないか？ とふと思う。もっと大切なことがある。吉増剛造という詩人はそのことを教えてくれる。読んでいると声に出して読みたくなる。ネットを探せば彼が朗読する姿を見つければ、その声を聞いてほしい。それまで本の中で文字として響いていた声とは全く違う種類の音が、自分の身体中に響くのを感じるはず。そしてまた本を開き、そこに並ぶ文字の声を聞けば、意味ではなく衝動に近いなにかと握手するみたいに、きつと初めて見る世界が立ち上がり、こんな偉大な詩人と時代を共にしていたのかと、いつかの未来に嘆息するんじゃないかしらん。

詫摩 昭人

Akifito Takuma



芸術学科

絵画 美術教育

① 『アート之力——美的實在論』

マルクス・ガブリエル（堀之内出版）

② 『絵画の解放——カラーフィールド絵画と20世紀アメリカ文化』

加治屋健司（東京大学出版会）

①「すなわち、人類の起源はアートだということ」。注目の哲学者が、あの手この手でアートについて語っています。作品を作る立場の人が、時に「アートとは？」と考えることはよくあることでしょう。そして、なかなか答えが出てこないものです。しかし、この書物では、「作品」の持つ強さを知ることができます。「アートは無道德的であり、無法的であり、無政治的である。」作品を作る人に勇気を与える一冊として、おすすめです。

②今でも、アメリカのカラーフィールド絵画の魅力は、色褪せていません。カラーフィールド絵画は、一九五〇年代にアメリカで登場し六〇年代に展開した単色、少数の色によって構成され、巨大なキャンバスに描くことが特徴の抽象絵画です。近年、再び展示される機会も増えています。筆者は、長年の研究から丁寧に同時代の美術批評の考察を行い論じています。そして、モダニズムの視点と異なる新たな絵画の魅力を感じさせてくれます。



野々村文宏

Fumihiko Nonomura

芸術学科

メディア論 美術批評

① 『権力の空間／空間の権力——個人と国家の「あいだ」を設計せよ』

山本理顕（講談社）

② 『箱男』

安部公房（新潮文庫）

① いまいちばん尊敬する意匠系建築家は？ と聞かれたら、迷わず山本理顕と答える。今の時代は、独自の作業仮説に基づいていわばアルゴリズムとして建築を生成する、理系としてとても優等生の若手が増えている。それはそれで結構なことと思うが、個人としての建築家が業績を積むごとに仕事が大きくなっていくと、個と大きな力との相対が

やがて軋（きし）みを作り出す。今までそれを何度も見てきた。その点、この本は、ハシナ・アレントの社会政治思想を下敷きにして、建築は社会の中にあるものなのだ、ということを教えてくれる。建築界のノーベル賞と呼ばれるプリツカー賞を山本理顕が受賞したのは、つまりそういう社会的視点が評価されたのだと思う。

② 男Aのアパートの窓のすぐ下にダンボール箱を被った「箱男」が住みつく。Aは空気を撃ち箱男を退散させるが、箱男になりたい願望がAに生まれ、それを実行に移す。小説『箱男』を読んだときの衝撃！ 中学生の私は安部公房のクールな実験小説にぞっこんとなった。今度は、高校に入ると石井聰互が『高校大パニック』で東映から熱く監督デビューして、映画界のパンクロッカーと呼ばれた。その石井岳龍（聰互から改名）が『箱男』を監督すると聞いて、両方好きな私が狂喜乱舞しないわけがない。では、小説と出来上がった映画は同じものなのか、違うのか。熱いのか冷たいのか。きみたちも、小説と映画を読み／観て、比較して欲しい。



半田 滋男

Shigeo Hamada

芸術学科

現代美術、美術館学

①『ヤンキーと地元——解体屋、風俗経営者、ヤミ業者になった沖縄の若者たち』

打越正行（ちくま文庫）

②『こども東北学』

山内明美、100%ORANGE、及川賢治装画・挿画（イースト・プレス）

① ほんの数日みかけないうちに打越さんが急逝してしまった。少し前にはこの冊子にも原稿を寄せてくれたのに。この冊子の原稿を最後に出すのは館長の私だから、僭越ではあるけど打越さんの本を紹介する。

沖縄の大学で数学教師を目指していた打越さんは、学生時に一九七〇年代英国の不良どもの生活に参加したエスノグラフィ『ハマータウンの野郎ども』の影響を受け、パシリとして暴走族に参加、建築現場に汗して貧困のうちに博士論文を仕上げた。その成

果をもとにしたのがこの本。生活の多くのものを犠牲にした代償でもあったその論文は希有な本格的質的調査として驚くべき内容だったが、名門大学に籍を置いて研究したわけではない彼に研究者としての道はひらけず「沖縄でバーでもやりますわ」と諦めていた打越さんが最後の最後にたどり着いたのが和光大学だったのだ。

建築現場で働いたのは、ただの参与観察ではなく生活のための時期もあったという。嗚呼、和光大学に辿り着くべくして辿り着いた人物ではないか。この文庫版は巻末の解説まで読んで欲しい。打越さんが元気な時に書かれた岸政彦氏による解説が、はからずも打越さんという人物の紀伝にもなってしまった。

打越さんの言葉のひとつひとつは決して流暢ではなかったが、大学人にありがちなうわべの打算や虚飾は微塵もうかがえなかった。この本でもそうだ。だから連日遅くまで多くの学生に囲まれ慕われていた。そんな賑やかな研究室は随分と少なくなったものだ。和光の伝統を集約したような存在で、そしてこれからの和光を牽引して欲しい人物だった。

② 字数がなくなったのもう一冊の紹介は省略。知らなかった日本のことを知るために読んでみるとよい一冊。



加藤 巖

Tawo Kato

経済学科

開発経済学

① 『DIE WITH ZERO——人生が豊かになりすぎる究極のルール』

ビル・バーキンス（ダイヤモンド社）

② 『マカン・マラン』シリーズ

古内 一絵（中央公論新社）

① 刺激的なタイトルだ。直訳すると、ゼロで死ぬ。おいおい、死ぬはないだろうと思う。ただし、本の帯には「経済学者も絶賛した最上級に人生に響く生き方」とある。著者の云わんとするのは「人生の目的はお金を溜めることじゃない。上手に使って人生を楽しむことが大切なんだ」ということ。稼いだお金は自分のため、そして家族や友人ら

と豊かな時間を過ごすために使おうと呼びかけている。さらに、著者は「お金は使い切れ」ともいう。何のためのお金なのか、人生で大事なことは何だろうと考えさせてくれる。ちなみに、著者はヘッジファンドマネージャーだが、映画プロデューサーやポーカープレイヤーとしても活躍している。まさに人生を謳歌している。

② マカン・マランはインドネシア語で「夜食」を意味するという。本作では、夜食カフェの店名となっている。店主はドラアグクインのシャルさん。元々は超エリートのお金持ちマン。お店は古い商店街の外れの、さらに路地の奥にある。見つけにくい。しかも、お店は夜だけ気まぐれに開く。でも、ここには様々な人がやって来る。その多くは最近しんどいなと感じている。シャルさんはお客の様子を見てお茶と料理を提供する。そのどれもが相手への気遣いに満ちている。ヘルシーで美味しいシャルさんの「優しい」料理をいただくことで人々は癒されていく。登場人物たちの暮らしも丁寧に描かれ、人生を愛おしく感じられる物語が続く。シリーズ四冊が刊行済み。



清水 雅貴

Masataka Shimizu

経済学科

環境経済学 地方財政学

① 『日本の農山村をどう再生するか』

保母武彦 (岩波現代文庫)

② 『なぜ椅子をつくるのか——松本グレイン・ノートの椅子製作者たち』

坂井素思ほか (Motoshin Books)

① 本書は、疲弊する農山村を「再生する必要があるのか?」「都市と違う存在意義とはなにか?」を問い直している。出版から十年以上が経過するが、指摘されている農山村の課題は何ら解決をしていない。国はこの十年間に農業政策を転換し、補助金を投入してきたが、もはや農山村には何をやっても再生は望めないのだろうか。本書では、農山

村をめぐる現状認識や衰退原因を明らかにしながら、解決策や再生の種を地域の実例から説論している。今読むことで次の十年で新しい農山村の再生を実現させる(都市に住まう我々も含めて)仲間が増えることを期待する。『里山資本主義——日本経済は「安心の原理」で動く』(角川書店) もあわせて薦める。

② 本書は、椅子製作者たちへなぜ椅子をつくるのかを問い、収録している。はじめに、本書が新品なのにカバーが付いていないことに驚く(装丁や紙質は重厚かつ壮麗である)。そして、製作者たちの語りは短文で文節にスラッシュ(／)が入っており、あたかも紙の上でX(旧 Twitter)のポスト(ツイート)を読んでいるかのような錯覚を覚えて面白い。あとがきまで読み終えると、実用としての椅子の価値を超えて、不都合で手間のかかる製作に没頭する椅子製作者たちが「経済価値だけでは測ることができない、大切にすべき価値」について語っているように理解できるかもしれない。『椅子クラフトはなぜ生き残るのか』(左右社) もあわせて薦める。

①『日本の近代化と民衆思想』

安丸良夫（平凡社）

②『自分のなかに歴史をよむ』

阿部謹也（ちくま文庫）

① 薪を背負って本を読む二宮尊徳像を見て、「勤勉」の二文字を連想する人も多いだろう。勤勉に儉約や孝行などを加えた諸徳目からなる、規範としての「通俗道徳」は、江戸時代後期、市場経済の展開にともなって農村が荒廃するようになると、全国的に普及した。その媒介者となったのが、二宮尊徳や大原幽学などの老農だった。著者は、これらの徳

目を実践しようとする民衆のエネルギーこそが、日本の近代化の原動力だったとする。同時に、そのイデオロギー性（「私が貧しいのは、私が勤勉ではないからだ」というように、今日で言う自己責任論として機能したこと）を指摘し、近代化する社会で生きる人々の困難を描く。日本において民衆史という領域を切り拓いた記念碑的作品。

② ドイツ中世史を専門とする歴史学者の著者は、卒業論文を書くにあたり、そのテーマを決めるべく指導教員（上原専祿）に相談すると、「それをやらなければ生きていけないテーマ」を選ぶように助言される。そして、それを追求することを出発点として、問題関心を彫琢していく（卒業論文では、そうしたテーマは見つからなかったという）。この問題関心というのは、大学の講義を受けると自然に形成されるわけではない。社会を注意深く観察する、本を読む、映画を見る、そして自分自身に問いかけるなど、諸々の営みを主体的に往還することで次第に形作られていく。いったい自分は何に興味があるのか、ぜひ大学生活を通して探求していったほしい。



永石 尚子

Naoko Nagaiishi

経済学科

ホスピタリティ論

①『空の旅の自然学』新版

桑原啓三ほか（古今書院）

②『働く居場所』の作り方——あなたのキャリア相談室——

花田光世（日本経済新聞出版社）

①「ホスピタリティ・サービス論」の授業の航空サービスをテーマにした回で、「航空の第一目的は移動ですが、そこで豊かな時間を過ごすことを楽しみにしている人もいます。飛行機の窓から見える景色を見た驚きや感動は旅の体験価値を向上します。」と解説して

います。その際に、この本の写真を紹介し、機窓から見える素晴らしい景色が充実した機内時間に繋がっていることを説明しています。私は山や川、海などの自然景観が一番好きですが、この本の面白いところは、都市、ディズニールランドなどの人工物や、虹や幻日などの自然現象の章があることで、まさに非日常です。一息つきたい時にパラパラとページをめくり、飛行機の旅気分を楽しめる本です。

②筆者は組織人事、教育、キャリア論の第一人者で、私の大学院修士課程の指導教授です。この本は主にシニア世代の事例を中心に書かれていますが、世代に関係なく「職場に居場所がない」という働く人たちの声に優しくロジカルに込める言葉や姿勢に救われた人は多くいると思います。居場所がなさそうにしている人は、個人の問題というより、組織の問題である場合が多分にあります。競争原理が根底にある人事の世界に、「矛盾に満ちた世界であっても前向きにしっかり生きる。そのプロセスこそに人生の意味がある。」と、「人としての尊厳・尊重」を大事にする理論は深く慈愛に満ちています。

若い世代も含めて、組織に関わる全ての人におすすめます。



半谷 俊彦

Toshihiko Hanaya

経済学科

財政学

① 『教育再生の条件——経済学的考察』増補 神野直彦（岩波現代文庫）

② 『プロジェクト・ヘイル・メアリー』（上）（下）

アンディ・ウィアー（早川書房）

① 財政学者が書いた教育改革論です。日本では一九八〇年代から教育改革が推進されていますが、そうした日本の教育改革を、あるいは、日本の教育制度そのものを、経済学的視点から考察・批判しています。世界は、かつて「農業社会」から「工業社会」へ転

換したように、「工業社会」から「知識社会」へ転換しつつあります。それに伴い、教育が経済に果たす役割も変わってきています。著者はそのことを指摘した上で、「学びの社会」の先進国といえるスウェーデンの事例を紹介しつつ、日本の教育を再生する方法を提示します。

② 科学者である主人公が、壊滅の危機にある地球を救う方法を見つけるため、地球から十一光年離れた星まで宇宙船で旅をするSF小説です。目的地で出会った異星人とコミュニケーションを確立し、友情を築く過程が描かれています。当然のことながら、最初は全く意思疎通をすることができないのですが、お互いが相手の身体構造や生態を研究することにより、最終的にはほぼ完全に会話ができるようになります。生命とはなにか、文化とはなにか、コミュニケーションとは何かを考えさせられる作品です。



岩見 昌邦

Masakuni Iwami

経営学科

データサイエンス

① 『13歳から鍛える具体と抽象』

細谷功（東洋経済新報社）

② 『アドルフに告ぐ』（全四巻）

手塚治虫（文藝春秋）

① 本書は、「具体」と「抽象」という二つの概念をわかりやすく解説し、論理的思考力を高めるための一冊です。私たちは何かを考える際、無意識に「具体」的な事柄と「抽象」的な概念を行き来していますが、本書を通してこれらを深く理解し、意識的に使いこなすことで、日常生活や仕事、勉強における思考の幅を広げることができるでしょう。『13

歳から鍛える……』というタイトルから子供向けの本に見えるかもしれませんが、実際には大人にも多くの気づきを与える内容です。特に、敬遠されがちな（？）数学についても触れており、なぜ数学が難しく感じられるのか丁寧に解説されており、数学に対する新たな視点を得られるでしょう。

② 手塚治虫先生の『アドルフに告ぐ』は、第二次世界大戦を背景に三人の「アドルフ」という名を持つ男たちの運命を描く壮大な歴史漫画です。ユダヤ人のアドルフ・カミル、ナチスに憧れるアドルフ・カウフマン、そして独裁者アドルフ・ヒトラー。それぞれの生き方が絡み合い、戦争の狂気や人間の葛藤が描かれており、単なる歴史物語ではなく、友情やアイデンティティ、正義とは何かといったテーマが現代社会に生きる我々に深く響くものになっています。善悪の境界で揺れ動くキャラクターたちを通して、社会の中で自分はどうか生きるべきかを考えさせられます。



海老原 諭

Satoshi Ebihara

経営学科

財務会計

①『申し訳ない、御社をつぶしたのは私です。』

——「コンサルタントはこうして組織をぐちゃぐちゃにする」

カレン・フェラン（だいわ文庫）

②『小さき者へ』

重松清（新潮文庫）

① 本書は、コンサルティング企業にながらく勤めてきた筆者の自省録です。コンサルティング企業とは、経営に苦しむ企業に対してコンサルティング（助言・支援）業務を行う企業のことをいいます。コンサルティング企業は、その業務を遂行するにあたって、聞き慣れない言葉や独自のツールを自由自在に繰り出してきますが、それらの多くは相手

の企業を考えてのことではなく、自らの権威性を高める（クライアントを錯覚させる）ために使われてきました（そして、現在でも使われています）。肩書きや見かけ上の格好良さにつられることなく、泥臭く人々の話をよく聞き、協働して問題解決にあたること

がどれだけ重要か、本書を通じて感じてもらえればと思います。

② 本書は、父親の葛藤を描いた短編集です。父親という存在は、強くあること、頼れる存在であることを明に暗に期待されます。多くの父親達もそのようにありたいと考えていますが、実際には失敗することもあれば、悩むこともあります。期待や理想と現実との間で、父親達がどのような苦しみを抱えており、それらをどのように乗り越えていくとしているかを知ることが、皆さんが社会に出て、自身の力で勝負しなければならなくなってきたときの支えとなるでしょう。家庭や社会から父性が失われたと言われて久しいですが、あなたが最後に父親と腹を割って話したのはいつでしょうか。本書を読んだ後は、みなさん自身も父親の話を聞く機会を持つてみてください。



大野 幸子

Sachiko Orito

経営学科

マーケティング論 消費者行動論

①『グロービスMBAマーケティング』改訂4版

グロービス経営大学院編著（ダイヤモンド社）

②『小学館の図鑑NEO 危険生物』

塩見一雄ほか指導・執筆（小学館）

① 様々なマーケティング関係の専門書や入門書を読んでいます。本書は理論やフレームワークと実際の企業例などのバランスがよくとれていて、文章も読みやすいです。マーケティングに興味のある学生はもちろん、社会人を想定して書かれているため、卒業してから読むと、よりしつくり来るかと思えます。

専門書を一冊読むのって大変ですよ。教員の私でさえ読みづらさを感じるものがあります。良書に出会うためには、やはり現物をパラパラと見て下さい。スッと読めそうか（思わず眉をひそめてしまうものはNG）が判断のポイントです。とはいえ簡単すぎるものは内容も薄く学べるのが少ないので、ちょっと難しただけど読んでみたい……レベルのものを手に取ってみると良いかと思えます。

② 生き物好きもそうでない人も、これを読めばむやみに生き物に触るのを止めるかもしれません。これまで、犬や猫などの哺乳類から、メダカなどの淡水魚やクマノミやナンヨウハギ（ニモとドリー）などの海水魚、また亀にトカゲにウーパールーパーなどと暮らしてきました。

私は生き物を見るのが大好きです。この図鑑には少し気持ち悪い生き物のページもありますが、その生き物が生息している国が載っているので、この国に行けばこんな生き物に出会えるのか！ といった楽しみに繋がっています。また、毒や寄生虫などがあると思ういなかった生物を知れますし、もし刺された場合の手当の方法なども載っているのだからになります。



小林 正典

Masanori Kobayashi

経営学科

地域経営論 観光ビジネス論

①『日本の観光——きのう・いま・あす——現場からみた観光論』

須田寛（交通新聞社新書）

②『東京裏返し——社会的街歩きガイド』

吉見俊哉（集英社新書）

①「経済波及効果の大きい観光は、地域社会発展のための大きな手段の一つでもあり、日本の力強い経済成長を取り戻すための重要な成長分野である。」本書はこのような観点に立って、観光のあゆみと構成要素を簡潔にまとめ、いまの動きと目指すべき方向を明らかにし、持続的観光、資源の保全、安全な観光を提示しつつ、これから発展していく

日本の観光の姿を描きだそうとする。裏打ちされた豊富な観光実務の経験を基に、著者は「産業観光」等の新しい観光を提唱するなど、疲弊した地域経済の再生に向けた熱い思いを語っている。内容面でバランスがとれていて全体的に読みやすく、観光に興味を持ち始めた人にはぜひお薦めしたい一冊である。

②東京の文化的中心といえど何かと港区、渋谷区、新宿区に注目が集まりがちだが、本書は明治・大正期まで文化的中心であった都心北部にスポットライトを当て、まち歩きガイドブックの雰囲気を出しながら人々を都市論に招き入れようとする。都心北部の周縁化の歴史から紡ぎだされる著者の豊富な蘊蓄は、現実的なものと幻想的なものがない交ぜにしながら、「もうひとつ別の東京」を思い起こさせ、それでいて全体としてはまちづくりの企画案にもなっている。都心北部の地理に詳しくない方には、Google Mapsで場所を検索しながら読むことをおすすめしたい。半分まで読んだところで、きつと現地に足を運んでみたくなるであろう。



當間 政義

Masayoshi Toma

経営学科

経営学

① 『エンパワリング・リーダーシップ』 青木幹喜(中央経済社)

② 『なぜ3人いると噂が広まるのか』 増田直紀(日本経済新聞出版社)

① 現代社会では、「自ら考え行動できる人材」や「その育成を目指す支援型リーダーシップ」が求められています。その一方で、若手を中心に「自ら考えない」主体性不足の従業員が多くなったとも言われています。こうした主体性が不足している従業員が、自ら考え、行動できるようにしていくリーダーシップが、エンパワリング・リーダーシップです。これはトップダウン型のリーダーシップではありません。「私が支えるからやってごらん」という様な従業員を支援するボトムアップ型のリーダーシップです。このエンパワリング・リーダーシップの内容と効果、そして、従業員の革新的行動や能力発揮を解明している数少ない書籍として薦める本です。

② 私たちの生活はネットワークに支えられていると言っても過言ではありません。人はネットワークを形成しながら生きていく存在です。一対一よりも共通の友人がいる三人の方が人間関係は続きやすいと言えます。しかしながら、プラスの側面ばかりではありません。集団思考や圧力から来るいわゆるイジメなど、マイナスの側面もまたネットワークによるものです。この書籍は、ネットワークについて、職場の人間関係、クチコミ、無縁社会など、様々な事例から効用を明らかにしています。優先順位の付け方、つながりを強くする三角形など、人生を充実させ、仕事の成功や豊かな日常をもたらす社会の中のネットワークを読み解くヒントとして薦める本です。



平井 宏典

Hiromori Hirai

経営学科

経営学 産学連携実践論

① 『レスポンスフル・カンパニーの未来——パタゴニアが50年かけて学んだこと』

ウィンセント・スタンリー、イヴォン・シュイナード（ダイヤモンド社）

② 『香港風味——懐かしの西多士』

野村麻里（平凡社）

① 本書は、以前紹介した『社員をサーフィンに行かせよう』が執筆された二〇〇五年以降、パタゴニアが創業から五十年かけて学び、取り組んできたことが分かる内容になっています。二〇二二年、パタゴニアの株式は社会福祉団体ホールドファスト・コレクティブが九八パーセント、パタゴニア・パーパス・トラストが二パーセント保有することに

なりました。これによって、創業者イヴォンの言葉を借りれば「地球が私たちの唯一の株主」であり、同社のミッションは「故郷である地球を救うためにビジネスを営む」となったのです。事業活動だけではなく、その存在自体（企業の所有論）にまで踏み込んで、地球とその環境に向き合うパタゴニアの姿勢からは学ぶことが多いと思います。そして、前書同様、本書ももちろん用紙はすべて森林認証、印刷用インクはすべてNon VOCインクで作られています。

② 東アジアの重要な経済拠点である「香港」は、一九九七年まで英国の統治下にあったことから洋の東西が入り混じる国際都市としての顔を持っています。

この本の著者は、中国返還の前年から六年間を香港で暮らしていました。返還バブル後のアジア通貨危機からのSARS、大陸から流入する移民、そして社会的・政治的な問題に悩まされ続けた果ての「雨傘革命」。時代に翻弄される香港にあって、著者は何気ない日々の生活を愛してやまないローカルフードと共に紹介しています。私たちも食べることがある叉焼や雲吞麵、そして甘すぎる西多士（フレンチトースト）が現地ではどんなものなのか。食を中心に据えることで香港での暮らしぶりの解像度がグッと上がります。香港の風土や人の気質も知ることができて楽しく美味しく読める推介の一冊です。



福田 好裕

Yoshifuro Fukuda

経営学

経営学 (経営管理論、組織論、経営戦略論)

① 『ルーズな文化とタイトな文化——なぜ〈彼ら〉と〈私たち〉はこれほど違うのか』

ミシェル・ゲルファンド (白揚社)

② 『左利きの言い分——右利きと左利きが共感する社会へ』

大路直哉 (PHP 新書)

① タイトル通り、ルーズVSタイトで国や階級など様々な事柄を分類・分析している。経営関連の比較研究においては、ホフステードの経営文化の国際比較、経済制度についてウィリアムソンを代表とする組織VS市場、小集団における個人の価値観から読んでベールズのSYNLOG等が有名であるが、本書はそれらの研究に匹敵するほど、興味深く、

なんともいつてもわかりやすい。世の中はときに、多くの矛盾を抱え、極端から極端へと二律背反の様子を呈していく。経営とは、自然と中庸に戻っていくのを待つのではなく、最も居心地が良いところへと止揚していく努力である。ゴルディロックスは正しい。私はと言えば、「自分にルーズで、他人にはタイト」なのかな。

② これまで何冊か利き手に関する本を読んできた。本書を読んで、左利きの人が住みやすい社会になるには右利きの人の共感が必要だとする視点に気づかされた。左利きである私にとって、左利きが忌み嫌われ、差別の対象であった(ある)とする部分の記述は、読んでいて苦しく悲しくも感じられた。とまれ、左利きをめぐる問題を歴史的、文化的、宗教的などと考察している点は勉強になる。左利きであることの個人としての最大の悲劇は、ギターの選択肢が圧倒的に少ないことである。その他のことはなんとか慣れました。せつかくの素晴らしい内容の本書であるが、手にするのはほとんどが左利きの人だろう。右利きの人には決してわからないでしょう。



吉沢 壮二朗

Sojiro Yoshizawa

経営学科

管理会計論

① 『帳簿の世界史』

ジェイコブ・ソール（文春文庫）

② 『Humankind 希望の歴史——人類が善き未来をつくるための18章』（上）（下）

ルトガー・ブレグマン（文藝春秋）

① 本書によれば、国家や組織の繁栄の影には常に会計専門家の奮闘がありました。例えば、ルイ十四世の会計顧問コルベール（宰相マザラン曰く「王国広しとも、これほど役に立つ男はほかにいない」）は王室の帳簿を精査、資産売却や債権整理を行い、王室に莫大な富をもたらしました。これにより財政再建と貴族平定が達成され、ルイ十四世はフ

ランスの覇者に。同時に会計や監査の軽視は没落を意味します。無謀な対外戦争や宮殿建設に反対していたコルベールの死後、ルイ十四世は帳簿を捨ててしまします。そのとき、財政破綻とフランス革命への道は始まりました。複式簿記、減価償却、会計監査などの歴史的役割について、豊富なエピソードも紹介されています。

② 人間の本性は利己的で残酷か。「性悪説」を裏付ける歴史的事件、諸学問の研究、哲学思想は数多い一方、周囲の人々を見渡せば、到底そうとは思えません。著者は、かのスタンフォード監獄実験が「やらせ」であったことの立証を手始めに、性悪説の根拠を次々と覆します。無論、過去と現在の悲劇もまた事実。人類はその欠点（見知らぬ人への根拠なき恐怖など）と美点（目の前の人への共感など）ゆえ、差別や戦争を行ってきました。例えばドイツ兵の原動力はナチズムや敵愾心ではなく、仲間との友情であり、権力者はそれを巧妙に利用したのです。著者は、人間の本性は善良である現実を認めた上での協力と工夫を提案します。未来への希望の一冊です。

館長挨拶

半田 滋男（図書・情報館長）

ネット配信や電子化のせいもあって、本の文化はふるわない。おかげで古くからある町の本屋はずいぶん減ったけど、かわりに小さな店でカフェ併設、棚にやらんだ本は店主が自分でセレクトしてる、そんなバーのような本屋がポチポチ増えている。本との接し方、ずいぶんと変わってきているのだ。古本屋酒場なんてものもあるし、本を読みながら一緒にビールを楽しめる店もある。みんなだって、見栄を張って難しいのを読むことはない。絵本だって、字の少ない画集や写真集だって立派な本だ。

それに本は、外観〃そのたたずまいだって充分に楽しめる。装丁を多く手がけたデザイナーの長友啓典さんは「装丁のよい本は、かならず中味もいい」と言った。

さて、この冊子にあるのは和光の教員たちがみんなに奨める本。あのヘンテコな人たちが、自ら影響を受けたタイトルが並んでいる。面白くないはずがない。ぜんぶ、和光大学が誇る図書・情報館にあるから、片っ端から楽しんで欲しい。飲食が出来るイートインスペースもある。今のところビールは提供していないけど、そのうち、ちよつと考えたい。

編集後記

〈日暮 美月（22 G） 表紙デザイン・イラスト〉

今回、縁あって『本を読もう！』第6集の表紙デザインを担当させていただきました。表紙のイラストは「日常の中の読書」をテーマに据えて、窓辺でコーヒーを飲みながら、ゆったりとくつろぎながら本を読めたら素敵だな……という私自身の理想のイメージを絵に落とし込んで描いてみました。

この表紙をきっかけに当冊子に興味を持っていただけたら幸いです。

〈橋本 光（22 G） 本文デザイン・レイアウト〉

生きている時間は死んでいる時間よりも実は短いのだそうで、この泡沫の瞬間に欲張りにならないのはもったいない、私はそう思います。「本を読む」ということは、手の中の小旅行を幾度も行き交い多くのものを吸収し、それらが言葉となり行動となり身体となり、人生になっていくことだと編集をしながら感じていました。絵本や詩集など読みやすいものからでも構いません。想像と貪欲さをお供にあなただけの旅を満喫して欲しいです。そして、この本がそのお役に立てば幸いです。

本を読もう！ [第6集]

きみたちに読んでほしい本を2冊あげると

.....

2025年3月31日発行

発行 和光大学附属梅根記念図書・情報館

〒195-8585 東京都町田市金井ヶ丘5-1-1

Email lib-serv@wako.ac.jp

- * 『本を読もう！』第1集から第6集およびその他の図書・情報館の刊行物は
ホームページ (<https://www.wako.ac.jp/library/about/publication/>) でも公開しています。
- * 紹介された図書は、原則として図書・情報館で所蔵していますが、多巻ものは一部のみ所蔵、
また一部所蔵していないものもあります。



